第74回（R6．2）

危機的状況と日本人

元日の能登半島地震に続き、2日は羽田の航空事故。令和6年は想像を絶する大惨事で始まった。日が経つにつれ、被災地の状況や事故の顛末も分かってきた。その中で心惹かれたのは、被災者や事故機の乗客の振る舞いや言動です。

火を噴くエンジン、機内に蔓延する白煙。誰もが死を覚悟したに違いない危機的な状況の中で、多くの乗客が整然と行動した。乗客乗員全員が短時間で脱出できたのは、乗客の冷静な行動があったからに他ならない。

一方被災地では未だ上下水道の復旧すらおぼつかない。被災地の人々の絶望や不安は、いかばかりかと思うのだが、報道で見聞する限り、彼らの口から救援への不満や批判の声はほとんど聞かれない。たとえ胸の内に絶望感や苛立ちを宿していても、多くの人はそれを顔や口に出すことはしない。

それにつけても思い出すことがある。今から30年前、中華航空の大型ジェット機が小牧空港で墜落。乗員乗客264人が死亡する大惨事が発生した。中華航空の幹部がご遺体の並ぶ自衛隊施設を弔問に訪れた際、遺族の反応に国柄が出たという。台湾の遺族は弔問者を大声で罵り、韓国の遺族は大声で泣き叫んだそうだ。それに対し日本人の遺族は「ご多忙のところ、ありがとうございます」と。

東日本大震災の時も「トモダチ作戦」を指揮した第7艦隊の司令官は、日本人の冷静さに驚愕したという。このような日本人の自己制御力に裏打ちされた冷静さは何に由来するのか？日本人が育んできた無常観、あるいは深い教養によるものなのか？私には論じる力はないが、その振る舞いや言動こそは受け継いでいきたいと思うのです。

2月4日能登半島地震支援のチャリティーコンサートを開催します。お待ちしています。